

岡野弘彦百首

一ノ関忠人 選



岡野弘彦

ひと夏のわれの憂ひの眼のやりと萩ひとむらを焼きつくすなり

うなじ清き少女ときたり仰ぐなり阿修羅の像の若きまなざし

『冬の家族』

父母のあらず夜半に起きいでて簞笥の環を子は鳴らしをり

草の上に子は清くして遊ぶゆる地蔵和讃をわれは思へり

わが胸に苦しき泉湧く音をひそかに測りるる白き耳

きつね妻子をおきて去る物語歳かはる夜に聞けば身にしむ

大正の末に生まれて奔放なる若さといふを知らず過ぎきぬ

月冴えてほむらだちくるあぢさゐの花むらふかく入りて眠らむ

中央棧橋さかりきてあまりさびしければ南京街に行かむといへり

魂は何方にゆきてしづまるや泊瀬のやまの峽くらく見ゆ

むごきこと我にしふるとのらせしが再びは眼をひらきたまはず

胸のうへに手を組みしまま眠りますさびしき癖をもちていましき

額の痣あをきほむらとなりて燃ゆる怒りの前に一夜わが坐し

ただひそかに自虐の襲を刻みこし世代の顔の一つか我も

二十二人の兵の屍を埋みをへ細々とその位置記しておく

銃身の菊花の章を潰せといふ敗れし日より五日めのこと

熱き息頬に触るるかと思ふまで近づかして射ちはなちたり

辛くして我が生き得しは彼等より狡猾なりし故にあらじか

すさまじくひと木の桜ふぶくゆゑ身はひえびえとなりて立ちをり

「滄浪歌」

悲しきは井光、土蜘蛛。倭なす神らのごとく聡くはあらず

杖もちて石打てば石走りいづおもしろきかなわれは酔ひたり

散りぢりに家族さすらひゆくさまをもつとも清きまほろしに持つ

春の夜の闇に酔ひつつ思ひをり跡もなく人を殺しゆくすべ

あかときの川原の臥し処たましひは草の穂架となりて飛ぶ 飛ぶ

海に遠き大和・山城 この国の古典のよどみ葬りつくさね

ただ独り夜舟を漕げばまほろしに顕ちてすずしき那智の滝みゆ

これの世にわがまだ知らぬ親ありて野を漂泊ふと思ふ夕ぐれ

病む祖母が寝ぐさき息にささやきし草葉のかげといふは何処ぞ

またひとり顔なき男あらはれて暗き踊りの輪をひろげゆく

夜の部屋に項を垂れておもひをり罪なき民のまた殺さるる

わが学ははげしくあらむ戦ひを再びと思ふ者なきにあらず

猿をがせしろがねの毛のほうほうと吹かるる梢に伸くたりこよ

ひそまりて暮るる海原あめつちを作りしもの悲しみの湧く

「海のまほろば」

朝ごとに庭の朱実を盗みゆく少年を犯す春のふしどに

胸うづくまでに美しひつたりとオホミズアオは羽根を伏せるる

春あさき野への葬りにおろおろと親が摘みゆく花摘み袋

みづからの尻におどろきて眼ざめたる老いの臥し處の暖まりなし

桜のはな苔む幾夜をほれほれとをとめを恋ふることくをりにき

ふるさとの地蔵ぼとけの片耳を缺きしはわれと誰に告げなむ

うつうつと眠り葉のききそめしまなこに揺るる黄金のえにしだ

雪の下に埋もれはてて村ひとつほろびしことを世がたりにせよ

白じろと散りくる花を身に浴びて佇ちをりわれは救はるるなし

遠つ世のやまと建を顔くらき若者ともに説きてすべなき

若き日を異土のいくさに戦ひてやまとをぐなの如く死なざりき

妻と夫と息をひそめて爆薬を調じてゐたる心思ほゆ

若き日をいくさの中に過しきてすべなき癖ぞ飯噛まず喰ふ

ふる國のやまとあやしと思ひ来れば亀石の顔に夕日照りくる

念珠集読みゐて不意にこぼれくる涙をわれは隠さむとせず

飲食の愛をかなしみ身の萎えし父に喰はするしら飯のつぶ

夕まぐれ涙は垂るる桜井の駅のわかれを母がうたへば

「天の鶴群」

とめどなくわが胸底にしたたれる蜜のごときを告ぐるすべなき

壮年^{さだ}すぎてなほ人恋ふるあはれきを人は言ひにき我も然^{しか}おもふ

しみ出づる膿をあはれと吸ひやりて愛慾よりもかなしかりけむ

魂はそこすぎゆくかあを蒼と昏れしづむやまた天につらなる

やうやくに二十を過ぎし若者がわれよりも世馴れてもの言ふあはれ

きびなごの蒼き肌へのつやめくはかの若き日のかなしみに似る

ながらへて悔しきいのち西郷と月照のごとく我が死なざりき

田に降りてまだ静まらぬ鶴^{たづ}むらの白きゆらぎの中に踏み入る

真白羽を空につらねてしんしんと雪ふらしこよ天の鶴群

卷向の穴師の村の昼ふかし大戸きませ老婆いで来る

年どしのがひそかなるかなしみもつぶさに知りて師はいますらむ

たましひの澄みとほるまで白鳥の舞ふを見てゐて去りなむとする

われの身の老いさすらへるはてぞ見ゆくやしく病みてほろびゆく父

地震ゆるをむしろ願へり揺りゆりてこの猥^{みだ}らさにほろびゆくべし

呆れぼれと桜ふぶきの中をゆくきみしき修羅の一人となりて

五十五歳のわれを思ひて悔しきは茂吉のごとき恋をせざりき

六十に至りてややに性慾を制し得し逍空はさびしかりけむ

わがおもふをとめこよひは遠くゐて人とあひ寝^ねるさ夜ふけにけり

母恋ふる空のまほらにとめどなく湧く秋あかね何とすべけむ

踏み分けて草生のなかに見いでたる真澄の墓の人めくあはれ

膝うづく霜夜の母がほればれと老いの蟋蟀^{せいてつ}のごとく歌へる

遊冶^{あそび}郎のごとくにやけて火のほふ愛想づかし告げられてゐる

雪ふかき箱根仙石原。師の家のみつまたの花ふみつらむか

ふるさとは無しわれの屍を埋むべき墓をいづちに定めなむとす

のつそりと暗き土間より立ちあがり老いたる犬はわが脚を嗅ぐ

夕映えの丘にそばだつ忠魂碑しづまりがたきころ見えくる

ほろぼろの戦艦大和またたきの間^まにし見たる蒼きされかうべ

夾竹桃はなむら冴えて咲く下に魯迅の墓の石低くある

数かぎりなき飛^ひ天は空をあまがけり地に楽の音のわきたつところ

この巨き地のしづまりに生くる民と戦ひて十五年つひに勝たざりき

裏庭のひばの木下に乾く石老いたる父のなげきの座そこは

屋敷木の梢ぼうぼうと風に鳴りそこ過ぎてゆく魂見ゆる

ごろすけほう心ほほけてごろすけほうしんじつといしごろすけほう

白砂のみそぎの庭にまよひ来し黒揚羽ゆらりゆらり息づく

牛の目の横向くときにあらはるる肉色のひだ見つつかなしき

若者はもつと怒れと思ひつつのどかにつづく論を聴きある

ほのかなる湧井の奥の譬れるを男ごころたけく瞻りをりたり

いとしきに図られてゐるたのしみを老いの惑ひと言はば言ふべし

身の渴きあはれと思へうつせ身は春沢水を汲みてむさぼる

海やまの蒼き涯てにまぎれ入りむなくならばたのしからむに

力うせし咒言のはてのかなしきを現し身は老いてなほ歌ふべし

「異類界消息」

籠に乾く蟬のむくろを捨てにゆく秋日しづけき背戸の畑に

しらとりの首なまめきて渡る朝麗しをとめはわがもとに来よ

わが骨は洋の底ひに沈めおけこの世の外ほかの恋とげむとす

すきのをの頭の虫をとり殺し大國主やさびしかりけむ

大正十三年文月七日に生れいでつ六十ちへてわが臍はらの緒にあふ

歳の夜の座に宣りくだす家の咒をいひ出むとしてはたと忘れぬ

刀とう抜きてわれに迫りし父の眼の蒼き怒りのよみがへる夜ぞ

人悼いたむ歌を刻みし石のうへに夜の桜のとめどなく散る

まざまざと夢に見てをり泰衡の首桶のうち深き朱の色

歌の表記・ふりがなは歌集に準拠しています。

岡野弘彦の短歌は、その調べの流麗さのわりには、それほどわかりやすいものではない。大和との境に近い伊勢の山中の、修験の色濃い社の代々神主をつとめる家の長男に生まれ、

生活のうえに生きる日本の古典的な定型に早くから接したことで、また国学意識を強くもつ折口信夫の最晩年に起居をともにして、その影響のもとに歌を作りはじめたことも、岡野の短歌をわかりにくくしている理由のひとつだろう。そのうえ戦中派としての美意識や倫理観もからんで、岡野の短歌の調

べには、日本人の未分明な部分が凝縮しているようにも思える。もちろん、そのことが岡野の短歌の可能性でもある。

こうしてほぼ年代を追って百首を選んでみると、清らかな憂愁をおびた一首の韻うたきが、しだいに粘着力をおび、しなやかな、あるいは、それこそしたたかな調べを獲得していく様子が興味ぶかい。岡野は、最近になって個人誌の創刊を宣言し、次代の短歌にむけての情熱を燃やしている。

一ノ関忠人（いちのせき・ただひと）「白鳥」編集委員